

北海道ポーランド文化協会 講演会(第75回例会)

ピウスツキと日本、 北海道、先住民族

2020年東京五輪までに意識しておきたい人物史



講師紹介 新井藤子 (あらい・ふじこ)

1972年大阪生まれ。牡牛座のO型。社会人入試を経て、2012年より北海道大学大学院文学研究科歴史地域文化学専攻北方文化論専修修士課程に在籍。専攻は博物館学。

現在は次世代研究の試みとして、民族学者として確立された従来のプロニスワフ・ピウスツキの人物史に、博物館活動家としての新たな側面を加えることを目標としている。趣味はお昼寝。



連絡先:北海道ポーランド文化協会事務局:hokkaidopolandca@gmail.com 080-32357840(越野)



ブロニスワフ・ピウスツキはポーランドのアイヌ民族研究者として知られる。1866年、現在のリトアニアに生まれ、19歳の時にロシア皇帝暗殺未遂事件に連座してサハリンへ流刑となり、刑期満了後も日本、米国、西欧を巡り、民族資料の収集、調査、それらに係る執筆、展示等に従事、第一次大戦下には、他者理解の手段として百科事典の編纂を行い、究極の平和に結びつけようと奔走した。

このような説明は、井上紘一ら日本の研究者が1970年代から行ってきたピウスツキの経歴や業績の掘り起こしによって定着した。彼らの研究活動は、ピウスツキの民族研究者としての人物史を構築するとともに、2013年、白老のアイヌ民族博物館における胸像の建立に結実した。

しかしながら、日本社会におけるピウスツキの認知度は現在もあまりに低く、彼に関する情報は常に特定の研究者に由来する。また、胸像はポーランド政府による「寄贈品」であり、そこに日本の主体性をみることは難しい。2020年東京オリンピック・パラリンピックを機に、北海道にも諸外国からの訪問客が増えるなら、その際、白老の地でピウスツキについて説明できる日本人はどれだけいるのだろうか。

そのような問題意識から、この講演では、会場のみなさまと情報を共有し「日本の文脈からピウスツキを諸外国に説明できる」途をさぐりたい。そのため、ピウスツキの最初の公的な実績となった、1900年パリ万国博覧会での極東先住民展示に焦点をあて、講師が明らかにした展示の実態、実情を出発点に考察を進める。

*1928年の博覧会国際事務局発足まで、オリンピックは万国博覧会附属のスポーツ大会として開催されていた。博覧会を通じて民族を考えることとオリンピックとは無関係ではない。

ピウスツキの生い立ちや業績を通して、日本の何がわかるのか、北海道は彼とどのように関わったのか、その民族研究は日本の民族のあり方のどのような面を明らかにするのか、日本人の主体性を問う時間を共有したいと思っている。
(新井藤子)